

大学地域連携フォーラム in 青垣

大学と連携して地域を考える ～まじる・きづく・かわる～

報告書

平成23年11月3日(木・祝) 10:00～15:00

佐治コミュニティセンター「来楽館」

主催：大学地域連携フォーラム実行委員会

共催：兵庫県丹波県民局

協力：関西大学、関西学院大学、兵庫県立大学、
神戸大学大学院農学研究科地域連携センター、丹波市、篠山市、
(株)まちづくり柏原、丹波市商工会青垣支部、兵庫県立氷上西高等学校、
兵庫県立篠山東雲高等学校、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校

はじめに

丹波地域は、中国山地の山間地域に位置する地方都市であり、京阪神大都市圏に近接していますが、少子高齢化や人口減少が進んでおり、大学等が地域にないことなどから若い世代の流出も続いているのが現状です。

そのような中、関西大学は2006年の日本建築学会近畿支部コンペをきっかけとして丹波市青垣町佐治地区に「関西大学 TAFS 佐治スタジオ」を開設、また同年、神戸大学農学部は篠山市に「神戸大学篠山フィールドステーション」を開設し、それぞれ文部科学省の支援も受けながら地域と連携した活動を展開しています。さらに、県民局の呼びかけに応じて、2009年には関西学院大学が丹波市柏原町に「関西学院大学柏原スタジオ」を、2010年には兵庫県立大学が同市山南町に「兵庫県立大学山南スタジオ」をそれぞれ開設し、地域と連携した活動を始めました。

このように、丹波地域では現在、4つの大学が活動拠点を確保し、各地域の課題を踏まえたテーマのもとに、学生が中心となって地域を活性化しようとする取り組みが、地域と連携して展開されています。

昨年12月には、丹波地域で活動している各大学と、その活動を受け入れている地域の方々が一堂に会し、丹波市柏原町において「大学・地域連携 4 大学合同シンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、大学と地域が連携することの意義を考え、交流・連携のさらなる発展の可能性を探ることを目的に、多くの方々と議論を深めました。

これを踏まえ、本年度は、関西大学が活動拠点を置く丹波市青垣町佐治地区において、毎年秋に行われている祭り「丹波八宿 青垣の秋」開催に合わせ、「大学地域連携フォーラム in 青垣」を開催しました。「丹波八宿 青垣の秋」祭りは、かつての宿場町・佐治市街地を、交流定住の拠点としての宿場町に再生することを目的に、商工会青垣支部が中心となり、地域住民と協働し、空き家や空き店舗、まちなみを活用し、出店や展示、飛脚リレーなどの楽しいイベントが数多く実施され、毎年たくさんの人が訪れます。

フォーラム当日は、お祭りとの同時開催も功を奏し、会場定員を超える多くの方々にご参加いただき、大変有意義なものになりました。

座談会では、青垣町佐治地区における取り組み報告を行い、大学と地域、大学と地元高校との連携について広く情報発信するとともに、フリーディスカッションによって、大学と地域が交わり、お互いにどう気付き、どう変わっていくのかなどについて意見交換を行いました。

現在、全国的にも課題となっている“空き家”の活用方法を試行錯誤している佐治地区の活動紹介では、“大学を受け入れている側の地域住民の変化”や“地元の若い中高生との幅広い連携”、“地域コミュニケーションの大切さ”等の発言があり、小さな成果がいくつも起こっているといった状況を実感させてくれました。

会場からの「研究員が常駐できない大学は、地域とどう関わっていったら良いだろうか」といった声に対しては、「研究員がいない時でも、スタジオが常に開いている状態を保つことができれば理想」、「地域の区長さんなどに自ら声をかけて、どんどんお願いをしていくべき」というアドバイスがありました。また、「いろいろな活動を展開する中での、成果と課題を教えて欲しい」という質問に対しては、「成果は、目に見えない小さな成果が起こっていること、課題はいかに地元住民のやる気を育てていくか」などの回答がありました。

お互いの違いに気付き、見えないものを少しずつ見えるような形にしていくこと、丹波地域全体で、各大学が協力して少しずつ小さな成果を積み重ねていくことが大切ではないでしょうか。

また、展示ブースでは、各大学がそれぞれの方法で空き家を活用し、日頃の活動内容を報告するとともに、多くの来訪者とコミュニケーションを図りながら、大学と地域の連携した取り組みについて広く紹介しました。

昨年度に続き開催されたこのフォーラムによって、大学と地域の連携活動がさらに広がり、小さな成果の積み重ねによって丹波地域がより一層発展していくこと、活性化していくことを切に願っています。

最後に、このフォーラムの開催に当たり多大なご協力をいただきました各大学や地域の関係者の方々、また、当日ご参加いただきました多くの方々に、改めて深く御礼を申し上げます。

目 次

1．開催状況の写真	1
2．フォーラムの概要	6
3．座談会	8
(1) 開会挨拶	8
(2) 活動報告	10
ア いま、佐治のまちで起こっていること	10
イ 空き家再生、佐治倶楽部などの取り組み	12
ウ 高大連携・地域連携の概要	14
(3) フリーディスカッション	18
4．展示ブース	23
5．参考資料	24
(1) 座談会アンケート	24
(2) 活動報告パワーポイント資料	32
(3) 開催チラシ	37
(4) プログラム資料	39
(5) 「丹波八宿 青垣の秋」チラシ	43
(6) 新聞記事	45
(7) 実行委員会	48

1 . 開催状況の写真



座談会会場 佐治コミュニティセンター「来楽館」

(1) 開会挨拶



実行委員会副会長 角野 幸博 関西学院大学教授



伊藤 聡 兵庫県丹波県民局長



辻 重五郎 丹波市長



(2) 活動報告



出町 慎 関西大学佐治スタジオ研究員



足立 宏 地元住民代表



加藤 昌宏 県立氷上西高等学校校長



(3) フリーディスカッション



山崎 義人 兵庫県立大学講師



(4) 各大学展示ブース



関西大学佐治スタジオ



映像等による活動報告



関西学院大学柏原スタジオ



展示パネルによる活動報告



兵庫県立大学山南スタジオ



恐竜化石の発掘体験



神戸大学篠山フィールドステーション



大学と地域の共同開発スイーツ

(5) 「丹波八宿 青垣の秋」祭りの様子



飛脚リレー



リアル紙芝居



神戸大学のブース



関西学院大学のブース（総合政策学部）



関西学院大学のブース（法学部）

2. 大学地域連携フォーラム in 青垣の開催概要

丹波地域では、4大学がそれぞれ活動拠点を設置して、各地域の課題を踏まえ、それぞれ違ったテーマで、学生のフィールドワークとともに地域貢献の実践など各種の取組を展開している。

これらの取組を発展・定着させ、大学と地域の交流・連携がより一層充実することを目指し、関西大学が空き家再生等による地域活性化に積極的に取り組んでいる丹波市青垣町佐治地区において、例年実施されている祭り「丹波八宿青垣の秋」に合わせ、下記のとおりフォーラムを開催した。

当日、座談会では、学生や地域住民が佐治地区の取組や各大学の活動内容について自由な意見交換を行い、学生と地域が交わり、お互いにどう気づき、どう変わっていくかなどについて考えることができた。また、空き店舗等を展示ブースとして活用し、参加大学がそれぞれの活動内容を広く地域住民等に紹介した。

記

- 1 日 時：平成23年11月3日（木・祝） 10:00～15:00
- 2 場 所：丹波市青垣町佐治地区、佐治コミュニティセンター「来楽館」
- 3 参加大学：関西大学、関西学院大学、兵庫県立大学、神戸大学
- 4 内 容：

(1) 座談会（10:30～11:30）

会 場：佐治コミュニティセンター「来楽館」広間

テ ー マ：「大学と連携して地域を考える」～まじる・きづく・かわる～

参加者数：約100名（学生、地域住民、まちづくり関係者、行政関係者等）

内 容：

[佐治地区での取組報告]

・空き家再生、佐治倶楽部 関西大学佐治スタジオ研究員 出町 慎
等の取組 地域住民代表 足立 宏

・高校大学連携の取組 兵庫県立氷上西高等学校校長 加藤昌宏

[フリーディスカッション]

コーディネーター：兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師 山崎義人

(2) 展示ブースで活動紹介（10:00～15:00）

参加大学が、空き店舗等3棟を展示ブースとして活用し、それぞれの活動を紹介

- ・各大学が展示パネルや映像等を用いて、丹波での活動内容を紹介
- ・県立大学ブースでは、恐竜化石の発掘体験も実施
- ・神戸大学ブースでは、地域と共同で開発したスイーツも限定配布

- 5 主催等 主催 大学地域連携フォーラム実行委員会
共催 兵庫県丹波県民局
協力 関西大学、関西学院大学、兵庫県立大学、神戸大学大学院農学研究科地域連携センター、
篠山市、丹波市、(株)まちづくり柏原、丹波市商工会青垣支部、
兵庫県立氷上西高等学校、兵庫県立篠山東雲高等学校、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校
- 6 事務局 兵庫県丹波県民局丹波土木事務所 まちづくり建築課
〒669-3309 丹波市柏原町柏原 688
TEL：0795-73-3862 FAX：0795-72-4596

座談会の結果概要

このフォーラムは、丹波市青垣町佐治地区で行われている大学と地域の連携活動、空き家再生、高校大学間の連携活動など、各種の取り組みを紹介するとともに、大学と地域はこれからどのように連携していくかについて考えることを目的として開催した。当日の参加者は、学生、地域住民、大学関係者、行政関係者等の約 100 名であった。

《活動報告 1》

「いま、佐治のまちで起こっていること」 関西大学 TAFS 佐治スタジオ研究員 出町 慎

関西大学が佐治のまちに関わり初めて 5 年が過ぎた。“関わり続ける環境づくり”ということで、空き家を佐治スタジオとして改修したことを機に、空き家活用方法について日々試行錯誤している。

昨年、地元の高校生や地域住民の方々と一緒に、地域の資源である空き家を、何かに使用できる仕組みを作ろうということで、空き家活用サークル「佐治倶楽部」を立ち上げた。活用方法などを議論しながら、地域の魅力を発信するような活動を実践している。

《活動報告 2》

「空き家再生、佐治倶楽部などの取り組み」 地元代表 足立 宏

佐治の住民として、30～40 年前の活気のあるまちから現状に至るまでの過程、また地域住民の変化についても説明した。また、「佐治倶楽部」の活動の様子、地域と大学との連携について紹介した。

今後、大きな改革・変革を望むのではなく、小さなことを地道にコツコツとやっていくこと、また、地域コミュニケーションというものを大切にしていきたいと考えている。

《活動報告 3》

「高校大学連携・地域連携の概要」 兵庫県立氷上西高等学校校長 加藤 昌宏

現在、“連携型中高一貫教育校”という新しい学校づくりに向けて行っていく学校の学校改革の中で、高校と大学の連携活動、地域との連携活動について紹介した。

今後、連携を進めていく上で、高校の校長や佐治スタジオのメンバーが代わることで、急速に方向性が変わったり、沈滞しては意味がない。関西大学と丹波市が結んでいるような連携協定を、氷上西高校も結んでいく必要があると考えている。

《フリーディスカッション》

テーマ：「大学と連携して地域を考える～まじる・きづく・かわる～」

コーディネーター 兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師 山崎 義人

まず、地域で活動している住民の方々からは、「関大が佐治のまちにやってきたことで、地元の人が、よその人に対して興味を持つようになった、まちの雰囲気良くなってきた」という発言があった。

他大学の研究員や学生からは、「佐治のまちに関大以外の大学が入ることに対してどう考えるか」、「研究員が常駐できない地域では、大学は地域にどう関わっていくべきかアドバイスが欲しい」、「様々な活動を展開する中での成果と課題を教えて欲しい」などの質問が挙がった。

最後に、山崎氏は「様々な立場の人が一緒に活動することによって交じり合い、お互いの違いに気付き、見えないものを少しずつ見えるような形にしていくこと、丹波地域全体で、私たちが協力して少しずつ小さな成果を積み重ねていくことが大切ではないだろうか」とまとめた。

3. 座談会

(1) 開会挨拶

大学地域連携フォーラム実行委員会副会長 角野 幸博

皆様おはようございます。朝早くから各地からお越し頂き本当にありがとうございます。このフォーラムを開催するにあたり、関係者の方々、地域の方々には本当にお世話になっております。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

近年、いろいろな大学、日本全国各地の大学が、地域とどのような形でコラボレーションをしていくか、協働でどのようなまちづくりの活動をしていくのかということについて、大きな関心を持っております。また、関心だけではなく、様々な動きが各地で起こっております。

この丹波におきましても、私どもの関西学院大学を始め、4つの大学が数年前から、非常に良い関係で勉強させていただいております。今日もたくさんの学生諸君が、こちらでいろんなことを教えていただくよう来ております。

このフォーラムでは、複数の大学がどんなことを地域で学ばせていただいているのか、といったことを相互に情報交換・意見交換して、またそれを地域の方々とともに、どのようにそれを進めていくのかということについて議論したいと思っております。普段は、それぞれの大学は、それぞれの場所、それぞれの地域のことしか残念ながら学ぶことがありません。こういう機会に、横の交流をもっと広げていきたいと思っております。

また、こういった大学と地域の連携は、始まりはとっても華々しく賑やかですが、それをいかに継続していくか、何年も何年も続けていくのかということについては、まだ日本全国、試行錯誤しているところばかりでございます。

そういう意味で、今日のフォーラムが、地域と大学との関わりを長く続けていくための、そんな知恵を出し合う機会にもしたいと思っておりますので、また会場の皆様も、後ほど意見交換の時にはどうぞよろしく願いいたします。

また学生諸君も、ここで一発いろんなことを聞いてみようか、ということで勇気を出していろいろ発言したり、質問をしてくれればいいかと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。

兵庫県丹波県民局長 伊藤 聡

皆様おはようございます。早朝からお集まりいただきましてありがとうございます。

現在、丹波地域には、残念ながら大学はありません。去年も言いましたが、高校生は卒業すると、丹波地域以外の大学などに通うか、下宿をします。しかし最近、4つの大学が、この丹波地域でスタジオを構え、非常に活発な活動を展開していただいております。県民局としても精一杯、後押しをしていくということでございます。

フォーラム自体は、昨年の12月に、第1回目の4大学のシンポジウムというものを開催しました。地域の方はあまりご存知ないかもしれません。日の設定があまり良くありませんでした。翌日が新聞の休刊日で、ほとんど取り上げられなかったということもあります。今日お越しの記者の方々には、明日の新聞記事にたくさん載せていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

また、去年もお願いしたと思っておりますが、学生の皆様方には、ここで地域の交流など、いろんなことを学んでいただくことも大切ですが、卒業されて何年か経って、この地域に住んでいなくても、是非、また家族と一緒に丹波を訪れていただきたい。

地域の方々に昨年お願いしたのは、学生の活動ですから、あまり大きな効果というのを求めないで、たまにはハメをはずすこともあるかもしれませんが、大きな心で受け入れていただけたらと思います。また、きっとこの丹波地域というのは、若い学生さんにとっても魅力ある地域ではないかと思っておりますので、いろいろな魅力ある面も是非とも

大学生の皆様にご案内いただけたらと思っております。

この佐治での開催、八宿まつりと一緒に開催するということになりましたが、実は、県民局のほうは特に何も言っておりません。実行委員会の方でずいぶんと考えられたということで、関西大学の拠点のあるこの青垣で、佐治地区でやられるということ、先程、まちを歩いてみますと、このお祭りとのフォーラムというのはすごくマッチングが良かったのかなと思っております。会場自体は少し狭かったかもしれませんが、その辺はお許しをいただけたらと思います。

今日のお祭りのように、4つの大学の大学生が、この青垣の佐治地区に集うというのは、きっと初めてのことでないかと思っておりますから、今日一日いろいろな出来事が起こることを楽しみにしております。

先程、角野先生がおっしゃったように、こういった大学の活動が、今後ともますます活発になりまして、地域一体となった取り組みが引き続き行われますよう、心から祈念をいたしましてご挨拶とさせていただきます。

丹波市長 辻 重五郎

おはようございます。本日は、丹波市の中心に、4大学のそれぞれの皆様にこのように一堂に会していただき、各スタジオの情報交換を大いにしていただき、また、地域とさらに連携して、これからも結びつきをますます深くしていただくという意味で、今日の会合は、“文化の日”に大変ふさわしい行事ではないかと喜んでおります。

丹波市も合併いたしまして早7年が過ぎました。8年目に入るところですが、皆様ご存知のように、大変、少子化であり高齢化も進んでいます。これをくい止めるというのはなかなか難しいことですが、丹波市の一番大きな課題として掲げておりますのは、“若者の定着”です。若い方々がどんどん都市へ流れていくのを止め、丹波市でそういった若い皆様にエネルギーを活かしていただくような、そんな地域を創っていかねばならないという大きな課題をもとに、職場の活動や地域づくりなど、あらゆる面でそういった取り組みをしているところでございます。

今日は、そういう意味で、市が取り組んでおります地域づくりも、今日、各旧町単位の地域づくりの主導員の方にもご出席いただいておりますので、本当にたくさんの皆様と情報を共有して、また、課題を共有して取り組んでいただければと思います。皆様とのこういった関わりの中で、なんとかこの丹波地域に愛着を持ってもらおうと、大きな期待をしているところでございます。

どうか今日は“文化の日”でございますが、こういった過疎化している、また高齢化している地域をどういう風な形で、賑やかさ、また高い地域性などを培っていくのかという中で、丹波市はやはり地域づくりは参画と協働を基本に、自分たちの住むところだから、まず自分たちでできることはなんだろうと、若い方もお年寄りの方も、女性も男性も、できることはなんだろうということを考えていただければ、という提案のもとに、地域づくりをお願いしているところでございます。

もちろん市としてどんどんやっていかなければなりません、一番の基本をそこに置いて地域づくりを考えておりますので、どうか今日、4大学の皆様、それぞれのテーマや地域の状況は違うと思っております。佐治と山南と、あるいは柏原と、あるいは篠山をフィールドにした神戸大学の皆様にもお越しいただいておりますが、それぞれ地域の課題や地域のテーマは違ってくると思っております。その情報を共有していただくことによって、より効果が倍増するのではないかと期待し、日頃の努力に対しましての感謝の言葉と今後の期待を込めたお願いを申し上げます、一言のご挨拶に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

(2) 活動報告

ア 「いま、佐治のまちで起こっていること」 関西大学 TAFS 佐治スタジオ 研究員 出町 慎

皆様おはようございます。関西大学佐治スタジオの研究員をしております出町と申します。今日はよろしくお願いします。

今日は、佐治でいま起こっていること、僕たちが佐治に関わり始めて6年目になるのですが、その間に関わっていて「佐治のまちで起こっていること」というのを紹介させていただきます。

(参照：パワーポイント資料...32頁)

まず、5年前、僕たちが最初にしたことは、空き家の改修をして、まちに“居場所”を作ったということです。それはどんな居場所かというと、「学生たちがふるさとのように関われる居場所」とありますが、地元の方々と交流したり、いろんなことが日常的に起こったりしているような“居場所”を作ろうということで活動を始めました。これは、「関わり続ける環境作り」ということで、活動当初からの関西大学としての基本的な活動の方針になっています。

このような形で空き家を改修したり、改修したスタジオで授業を行ったり、交流会やイベント事の打合せをしたり、5年間にいろんな出来事がスタジオを拠点に起こっています。

このような活動を踏まえまして、この丹波八宿祭りは僕たち関西大学も関わらせてもらい、地元の方々と一緒にやっているお祭りです。このお祭りは年に1回ですが、“佐治の街道筋に昔の宿場町風情を取り戻そう”ということで、地域の方々と一緒にいろいろ議論しながら関わらせていただいています。

2年前から、地元の方主体で、「丹波布の里まつり」というお祭りを2ヶ月に1回か3ヶ月に1回くらい開催しています。

これは、空き家が増えつつあるこの地域で、「地域の資源を活かしながら何か活動できないだろうか」「課題だと言われている空き家を地域の資源として活かしていけないだろうか」ということで地元の方々と一緒に頑張っています。丹波布などの佐治の魅力や資源、佐治での活動をどうやって伝えていこうか、と言いながら、夜な夜なこんな感じで地元の方々がお祭りの準備をしたり議論したりしています。また、氷上西高校の生徒さんたちにも参加してもらいながら、地域の資源をどう活用していこうかということを実践しています。



関西大学佐治スタジオ 外観



学生たちによる空き家改修の様子



佐治スタジオでの授業



「丹波布の里まつり」の準備作業

そういった地域ぐるみのイベントもあるのですが、3年前から、地元の人たちと氷上西高校の生徒さんたちと一緒に地域資源を使って何かおもしろいことができないか、ということで、空き家を短期的に使ったり、うどんを作ったりしています。今日も氷上西高校の生徒さんたちと一緒に出店している「土田うどん」といううどんを作ったり、写真を撮ってギャラリーのように展示したり、いろんなことをしながら地域の魅力を発信するようなことを続けています。



空き家をギャラリーとして活用

さらに、そういった高校生たちも含め大学生や地元の方々と一緒に、何か空き家を使える仕組みを作ろうということで、空き家活用サークル「佐治倶楽部」というものを昨年立ち上げました。「こんなことに使ってはどうだろうか」など会員と議論しながら実践していています。木材や食材といった地域資源を使ってワークショップをしたり、お試しかフェをしたりと、いろんなことをしながら地域の資源である空き家を活用する仕組みづくりが始まっています。



「佐治倶楽部」会員による議論の様子

今日はその中で、実際にイベントがあるごとにお店の土間を貸していただいている足立宏さんにも来ていただいております。本当にいつも僕たちの活動に理解を示していただいております。足立宏さんには、今日は、日ごろの想いを熱く語っていただきたいなと思います。

また、氷上西高校の校長先生に来ていただいております。学生たちと一緒に交流して何かできるだろうかということもいつも議論させていただいておりますので、その辺りの話もいろいろ話していただきたいなと思います。僕からの説明を終わりたいと思います。ありがとうございます。

イ 空き家再生、佐治倶楽部などの取り組み 地元代表 足立 宏

失礼します。地元に住んでおります足立と申します。生まれは昭和 20 年でございます、66 歳です。

少し、この中町のことと言いますか、この通りのことについて昔のお話させていただきたいと思います。

ここは昔、佐治町でした。神楽村、遠阪村、芦田村という 1 町 3 村が昭和 30 年に合併しまして青垣町になったわけです。昭和 30 年 40 年と言いますと、私が小学生の頃です。その頃の町というのは非常に活気がありました。どれだけ店があったのか少しご説明をしますと、本屋さん、薬屋さん、酒屋さん、電機屋さん、洋品店、呉服屋、履物店、お菓子屋さん、お医者さん、食料品スーパー、魚屋、自家製のパン屋さん、金物店、印刷屋、カメラ屋、それから農協があり郵便局があり、当然店舗の数はだいたい 30 店舗くらいで、非常に活気があったということでございます。



現在の佐治のまち並み

その当時は、この表通りは車がほとんど通らず、当時はクーラーもございませんので、私が子どもの頃は縁台を表に出しまして、そこで将棋をしたりトランプをしたりと、“地域コミュニケーション”が非常に良かったなぁと私は思います。残念ながら今は、ご覧の通り非常に人通りも少なく、寂れた状況でございます。

そのような中で、出町研究員の方からもご説明がありましたとおり、できるだけこの空き家を活用して、どうにかまちを活性化しよう、という動きになっております。

実は私も昔、吉美屋という履物店を経営しておりました。もうやめて 15 年ほどになりますが、私と同じようなお店がたくさんありまして、この通りが歯抜け状態になっているわけです。これはここに限らず、日本全国どこでもシャッター通りがあり非常に寂しくなっております。その中で「コミュニティがなくなってきている」「活性化しよう」と言われております。ここ佐治でも、そういう必要性があるのではないかなということで、先程ご説明がありましたように、様々な行事を通じてまちづくり活動に参画させていただいており、活性化を少しでもやっといこうと動いているというのが実情です。

その中で一つは、新町に佐治スタジオという関西大学の拠点があるわけですが、私もここをよく訪れて飲みながらワイワイガヤガヤとやっています。

この商店街というのはだいたい間口が 3 間 4 間、奥行きがだいたい 20~30 間くらい、そして土間があって通路があって、明かり取りのために中庭があるというのが、家の造りになっているのですが、そういった古民家に関する話などを酒の肴にしまして色々話し合ってきました。



佐治スタジオに集う地域住民の方々

いずれにしましても“地域コミュニケーション”というのが非常に重要であるという風に私は認識しています。

今後の課題としましては、そんなに大きな改革・変革は望んでいないわけで、「継続は力なり」と言いますが、とにかく小さなことをコツコツとやっていくことが非常に重要ではないかなと思います。

それから今日、丹波市長がお見えになられております。ここには昔、青垣町の庁舎がありました。また、丹波市には4月にまちづくり部というのが作られたということで、もう少しここの連携を密にさせていただき、活性化をはかっていただけたらと思います。

それから、もう一つ、来楽館についてお話をさせていただきますが、この「来楽館」というのは、読んでいただいたら分かりますように、“来て楽しむ”という名前にしております。これがさら地になっているときに、丹波市の方に佐治のコミセンを造ってはどうかと提案をたたきまして、3年前、ここにコミュニティセンターを造ろうということになりました。ただ単なる公民館のような建物では面白くないということで、当時建設委員だった何人かが寄りまして、建物のレイアウト、設計をさせていただきました。



佐治コミュニティセンター「来楽館」

見ていただいたら分かりますように、外観は白壁造りにして周辺とマッチするような建物にしました。大きな特徴は、ただ単なる箱にするのではなく、道路とこの建物、グラウンドを動線で結んで、今日の八宿まつりのようなイベントに使いやすい建物にしたことです。そして尚かつ、今日は畳が敷いてありますが、普段はダンスの教室など、あらゆるものに使えるようにしようと企画しました。

それからもう一点、この部屋（茶室）は、利用率は低いのですが、住民の方々に自由に来ていただいて自由にお茶を飲んでいただくということで造った部屋になります。

話は逸れますが、HONDA という自動車メーカーをご存知と思いますが、HONDA というのは非常に独創性のある会社です。これは本田宗一郎さんが創設された会社ですが、非常にユニークな会社で、その中の一つに「ワイガヤ会」というものがあります。「ワイガヤ会」というのは、従業員が昼の休み時間や終業後、何人が寄って、とにかくワイワイガヤガヤします。そのワイワイガヤガヤの中で、自己啓発あるいは情報の共有だとか、その中でまた新しいアイデアが生まれるという、これはHONDAの企業文化なのです。

そういう意味でも、地域もコミュニケーションが非常に重要ではないかなと私は思っております。これからも地道にコツコツと活動していきたいなと思っております。よろしく願いいたします。

ウ 「高大連携・地域連携の概要」 氷上西高等学校 校長 加藤 昌宏

丹波と氷上西高校をこよなく愛する、篠山市出身、三田在住という加藤でございます。

(参照：パワーポイント資料...34頁)

この氷上西高校の校長として1年半が経ちました。本校の正面玄関のところに、旧青垣町の町木であるキンモクセイとギンモクセイがありまして、まさに青垣に生まれ、青垣に育てていただいた学校と考えて、今、学校経営をさせていただいております。



高校正門玄関にあるキンモクセイとギンモクセイ

兵庫県教育委員会が発表しましたとおり、本校は次年度から、「連携型中高一貫教育校」になります。新しい学校づくりに向けて、今試行中であります。地域のすべての中学校と新しい学校づくりをしようと考えております。その狙いは、一番上に掲げておりますように、“たんばに根ざし、明日のたんば担う子どもたちを創りたい”ということ、丹波市教育委員会のスローガンとも一致しており、私の想いも、職員の想いも同じでございます。

我々は、地域の中学校や地域の方々、あるいは大学と連携した教育活動をしていますが、これは学校教育の柱です。

今、ご覧に入れているのは、本校の出身中学校の一覧です。1名は篠山市の丹南中学校ですが、あと84名が全て丹波市在住、7つのすべての中学校から来ています。85名というのは兵庫県で一番小さな全日制普通科高校です。学校は小さくても役目はいっぱいあります。

出身中学校 一覧表

中学校	1年	2年	3年	合計
氷上	17	11	10	38
青垣	6	9	13	28
春日	4	1		5
市島	2	3		5
柏原	2	2		4
和田	1	1	1	3
山南	1			1
丹南		1		1
合計	33	28	24	85

話が少しそれますが、本校は今、学校改革の最中です。全部で7つの改革を行っていますが、今日お話しするのは4つ目です。

4番目の改革4、「市や地域の諸団体、関西大学との連携を拡充していく」いろんなことをやっていますが、このことについて、概要を報告させていただきます。

それでは、「大学と連携したフィールドワークの実施」、関西大学との連携についてお話しします。

本校、帰りに寄ってもらったらいいのですが、関西大学佐治スタジオと本校の距離はわずかでして、ちょっとお茶を飲みにいこうとか、生徒も帰りに寄って見たらという距離にあります。本校と佐治スタジオの関係は、位置に恵まれていると思います。

出町研究員からもありましたように、関大佐治スタジオとの連携は、本格的には2年前からです。本校は、“地域とともにあり、明日の地域の担い手を創る”というのが課題ですので、関大佐治スタジオはまたとない学びのパートナーと考えております。

子どもたちは、もちろん学校で学びますが、地域でも学びます。それが本校のスタイルになっています。

先程もありましたが、今日のお祭りで「土田うどん」を製造・販売しているのは本校の生徒です。昨日も遅くまで、

氷上西高校の取り組む学校改革

- 改革1 丹波地域連携型中高一貫教育校に(H24~)
- 改革2 少人数教育と大学進学対応の強化(H23~)
- 改革3 情報力強化等特色ある3類型新設(H25~)
- 改革4 市や地域の諸団体、関西大との連携拡充
- 改革5 全員入部・外部コーチで部活動を活性化
- 改革6 マレーシアへの探究型修学旅行に(H24~)
- 改革7 市花カタクリがモチーフの制服に(H24~)

その他 通学バスの確保、ランチサービスなど

研究員の出町さんに調理室で指導していただいて、生徒は粉まみれになってうどんを作っていました。普段は勉強が仕事ですが、うどん作りも楽しいなとやっております。

県の方にはまちづくり室、市の方ではまちづくり課、本校もまちづくり部を去年から立ち上げています。今年は本格的に、関大佐治スタジオだけでなく、いろんなまちづくり関係のボランティアやイベントに、とにかく顔を出させてもらっております。



関大生とのまちづくり研修

丹波市は関大と連携協定を結んでいます。例えば明後日、関西大学の学園祭では、丹波市からバスを出していただいて、本校生、職員、西高を支援する会という会のメンバーなど、ざっと20人くらい関西大学に行きます。丹波市のコースで丹波市の観光案内や物産の紹介をいたします。

本校生は普通科ですが、商業を選択科目にしています。大半がそういうこと(丹波市のアピール)にあまり慣れない生徒ですが、中にはちーたんのぬいぐるみに入り、意欲的に活動する生徒もいます。今年で2年目かと思います。その他、関西大学のイベントに誘っていただき、行かせてもらっております。

話は逸れますが、昨年、この関西大学佐治スタジオが、兵庫県の「人間サイズのまちづくり賞」という賞を受賞されました。また今年度は出町さん自身が、青少年本部の「若人の賞」というものを受賞されました。本当にめでたいし、ありがたいと思っています。推薦者は僕です。表彰式、副知事から表彰状をいただいたのですが、出町さんがどうしてもまちのイベントで忙しいということで私が行って、60歳ですが「若人の賞」を出町さんの代わりに受け取りました。

関西大学とのあるいは佐治スタジオとの連携もそうですが、私自身は、丹波市と関大が結んでいるような“連携協定”が必要だと思っています。例えば校長が代わったり、あるいは関西大学佐治スタジオのメンバーが代わって、急速に方向性が変わったり、活動が沈滞するのでは意味がない。活動を継続・定着させるには、なんらかの連携協定が必要だと思います。

関西大学の社会連携部、今日来られていますけども、お願いして去年から、連携協定を結ぼう、それで本校の職員も生徒も動いていくのだとお願いしているところです。「指定校」のことは言いません。連携協定を結びましょう。それで進んでいこうというのが本校のスタンスです。連携活動を経験した生徒の中から、関大に入学したり、地元に戻って来て、佐治のまちづくりに加わってくる子が出れば本当によいと思います。連携協定を結ぶ必要性を痛感しています。

ここから長くなるといけないので、簡単にしますが、この佐治自治協議会、来楽館があるこの地域と連携して今年、いろんな活動をさせていただいております。

特に左上の赤で示しましたが、丹波の森公苑が、“オオムラサキが舞う里づくり”を推進しておられます。オオムラサキ、これは国の蝶々ですね。本校も、去年からやろうということで、佐治の小学校、それから青垣中学校との連携も始めました。また、佐治自治協議会には、かなり高価だと思いますが、飼育用のケージを作ってくださいました。まさに小中高、地域ぐるみで自然環境、命について考えると、理科教育での活用など、さまざまな形での取り組みを始めたところです。



オオムラサキの飼育(小中高地域連携)

これは、地域との連携活動の代表的なものをピックアップさせていただきましたが、丹波市をはじめ、観光協会や商工会、体育協会や社会福祉協議会、各事業所など、もちろん小学校中学校、かつての保育園幼稚園、現在のこども園、いろんなところと連携して我々の学びが成り立っています。もちろん教科学習は基本的には学校でやっておりますが、地域でも学ぶというスタイルで本当にお世話になっております。高源寺のご住職は本校のOBであります。

左下の、佐治自治協議会主催のパソコン講座は、昨年から始まりました。週1回、4回くらい連続で開いております。本校の教員も入りますし、佐治に住んでいる本校生も入ったり、関大の学生さんが来られたときは応援いただいたり、まさに地域ぐるみでかなり年配の方も一緒に、基礎からのパソコン講座をやっております。

今年も11月に4回、講師はこの地域の中学校の先生で、ぜひ応援をしたいと思っております。その他、3世代グランドゴルフ大会や、あるいは、本校の体育大会で予定しておりました防災リレー、実際には雨が降って延期になったのですが、そのような企画にも地域の方々と、あるいは中学校と連携して取り組みを進めたいと思っております。



佐治自治協議会主催のパソコン講座

3日程前、小さな学校でもこれだけできるということで、神戸新聞の取材がありました。明日は朝日新聞の取材があるようです。話題性があるので来られたみたいですが、学校の改革がさらに前へ進み、地域おこし、まちづくりに繋がればいいと思って、あと5ヶ月この学校で精一杯やります。

本校の広報は、いろんな形でやらせていただいておりますが、左は、去年の関大の「何でも相談会」に行かせてもらった際の特集の新聞で、HPにも載せています。右側は毎月発行している「スクールニュース」です。これは佐治の自治協議会にもお世話になり、小中学校とも連携している、オオムラサキの飼育についての増刊号です。会場の皆様にもお配りしています。

また、「夏休みの特集号」ですが、とにかくいろんな地域行事をやっていることがご覧いただけます。関大佐治スタジオが初めて(氷上町成松の)愛宕祭りに出でいくので、力を貸してくださいということでした。我々、丹波市の西高と思っています。青垣だけでなく、氷上地域でもいろんな活動を展開したいと思っております。愛宕祭りでは、“つくりもの”あるいは東日本大震災の募金活動ということで、野球部もテニス部もまちづくり部も生徒会も参加しました。でも、“つくりもの”ではあまり積極的ではなかったみたいです。右側が一番最新号、10月下旬の号です。



氷上西高発行のスクールニュース

いろんなまちづくりの仕方があると思いますが、僕はイベントというのは大事だと思います。お金もいるのですが、それがまちづくり事業の活性化に繋がったり、もちろん学校の活性化に繋がったり、あるいは中学生や高校生の教育に役立つのなら、いろんなイベントをやっていきたいと思っています。

今回の西高の芸術鑑賞は、地元在住と言いたいのですが、地元「出身」の足立知識さんのコンサートです。いつものメンバーですが3名お呼びしまして11月9日、青垣住民センターにて、一般参加可能ですのでもし良かったら来てください。これは青垣中学校と合同でやっています。

右側はラモスさん、サッカーで有名ですが、今はビーチサッカーの全日本の監督です。

それからこれが面白いです。英語落語の桂かい枝さん。そんな方々が本校の文化祭などで佐治のまちに来られて、活性化の助けをしていただきます。是非お越しください。

以上で報告を終わります。氷上西高の宣伝みたいになってしまい、申し訳ありません。関西大学佐治スタジオは地域にとっても、西高にとっても「宝物」です。

(3) フリーディスカッション

「大学と連携して地域を考える～まじる・きづく・かわる～」

山崎（コーディネーター）

兵庫県立大学の山崎と申します。よろしくお願いたします。

少し兵庫県立大学の案内をしますと、「山南スタジオ」ということで山南町の谷川の近くで、佐治スタジオのような民家をお借りして、同じように活動を展開しています。

ここからは、みなさんと少し意見交換をするような形で、やっていけたらなと思っています。

先程、3名の方から佐治の活動のお話がありましたが、「実態はもう少し違う」とか、佐治の住民の方々から何かご意見、例えば「私たちはもっとこんなことをやっている」など、そんなお話しただけならと思いますが、どなたかご意見いただけないでしょうか。

「佐治倶楽部」という活動をされているとお伺いしておりますが、佐治倶楽部の方はいらっしゃいますでしょうか。どなたでも、「関大が来てからこんな活動ができて面白い」など、是非何かご意見いただけたらと思います。お願いたします。

足立（成人）

みなさんこんにちは。佐治倶楽部の足立成人と申します。今日は皆様、佐治へようこそ来ていただきありがとうございます。関大の出町研究員の方からの佐治スタジオについての取り組みの中に、「佐治倶楽部」というものがありました。今は空き家になっているお家や、昔はいろいろなことに使っていたけれど今はただの土間になっているところを、みんなで何か有効に活用しようということ、もう一つは活用の中で、“まちなみの保存”であったり、“地域の方々とのコミュニケーション”ができたならということで「佐治倶楽部」は活動しています。

地元の中でそういった話はしますが、具体的に動くということがなかなかできませんでした。でも、関大の学生が、次から次へと新しい学生が来てくれて、その人たちと知り合いになると、どうしても向こうは若くて、しかも単発で来ていますから、熱い気持ちでやってくれます。しかし地元としては、毎年受け入れないといけないので、お互いに刺激があって「よし頑張ろう！」という気持ちになります。その気持ちが、地域のみなさんにできるだけ広がるためには、今日のようなところにたくさん参加していただいて、同じ話を聞いたりしていただくと、もっと活動に関わりやすいと思います。今日ここに来てもらっている佐治の方々にはどんどん参加していただきたいなと思います。以上です。

山崎

ありがとうございます。お隣の方、同じ法被を着ておられますが、補足などございますか。

足立（正二郎）

同じく地元で同じ製材業をやっております足立と申します。よろしくお願いたします。

先程、成人さんの方から全て言われたので補足になりますが、年代的に僕らの年代40代、50代と、学生さんとの関わりだけでなく、おじいちゃんおばあちゃんから小さい子どもたちまでの広い範囲の人たちが、一緒に交流できるような方向が望ましいと思います。できれば広い範囲での活動を、地元の方々はずごく望んでおられます。

また、今まで佐治の人たちは、若い方や地元の人でない人が普通の日に通りを通られると、じろっと睨まれていたと思います。それが、学生さんたちが来られることによって、最近では、挨拶したり、どこの大学の人だとか、よその人に対して興味を持つようになりました。前は横目で見られていたのが、今では、“ちょっと挨拶してみよう”“誰なんだろう”と、なかなか雰囲気僕も含めてよくなってきたと思います。以上です。

山崎

ありがとうございます。土間などを使って店先でコミュニケーションをとると、いろんな世代の人たちの関わりがあるし、また、外の繋がりもできて、よその人に対して興味が湧いてくるというような効果があるのでしょうか。

また他の大学も、兵庫県立大学だけでなく、神戸大学や関西学院大学が丹波地域に入ってスタジオを設けているのですが、少し活動紹介もしつつ、「佐治はこんなところがいいな」とか、「もうちょっとこうしたらいいのではないか」などのお話を伺えたらと思います。何かご意見いただけますでしょうか。

布施

神戸大学の篠山フィールドステーションというところで、佐治スタジオと同じように学生を受け入れたり、学校の授業の拠点となっております、その研究員をしている布施と申します。紹介はさておき、今日、お話を聞いていて率直に疑問に思ったことを少し聞かせていただければなと思います。

先程、氷上西高校は、「関大命」だというお話でしたが、今日4大学の学生たちがたくさん来ていて、今後もこのようにいろんな大学の学生が来るということに対して、どういう風なお考えをお持ちなのかと、もし聞かせていただけたらと思いました。よろしくお願いします。

加藤

喜んでお受けいたします。関大は命ですが、前任校は篠山鳳鳴の教頭でした。そのときも一生懸命地域づくりをしていました。神戸大学さんと一緒に私も活動させていただきました。その地域ごとに、それぞれ拠点大学があっていいと思います。しかし来られるのだったら、来ていただいたらいいと思います。

山崎

学生さんから何か意見はないでしょうか。「私たちにそんなに来てくれと言われても、なかなか行けないです」など、何かあるのではと思うのですが、ありますでしょうか？

北出

関西学院大学の北出と申します。僕たちは柏原で、今で3年目のまちづくり活動を行っています。他の大学さん、特に関大の出町さんは、ずっと佐治のスタジオにいらっしゃるということですが、僕たちは柏原のスタジオに常駐できない状態が続いています。それで、どうしてもとぎれとぎれの活動になってしまいがちで、そんな時にどう関わっていったらいいのかしっくりイメージができていません。そこで、柏原スタジオのように常駐していなくても、「こうやって関わって、こうやって継続していったらいいだろう」というアドバイスを少しいただけたらと思います。

出町

本当は週1回だけいるはずなのですが、週1回がだんだん長くなりまして、僕は実際今、月1回家に帰れるか帰れないかというくらいです。それでも実は、僕も毎日ずっとスタジオにいるわけではなく、大学に行ったり、成松や氷上などの丹波市内のあちらこちらに行くこともあって、スタジオを空っぽにしていることが多々あります。そのようなときにどうしようかということで、先程紹介しました「佐治倶楽部」というのを立ち上げさせてもらいました。とにかく、「スタジオがずっと開いている」ということがすごく重要だと思います。ですので、地元の方みなさんに協力していただき、僕が1ヶ月ずつといない間でもいろんな方に使っていただけるように、常にスタジオを開け続けるということを心がけています。もし参考になるのなら、学生がいない時でも、地元の方々にどんどんスタジオを使っていただいて、

“常にスタジオが開いている状態”というのを作れたらいいのかなと思います。僕たちもまだ全然上手くいっていないのですが、地元の方々のご協力を得て、少しずつ実現に向けて試行しているところです。

足立（宏）

少し今のことに関連した話ですが、私が区長をしている頃、出町くんは一生懸命やってくれているのですが、周りは知らん顔をしていました。出町くんは遠慮しいなんです。当時は、“もっとPRをやっていかないといけない”ということでした。「少なくとも佐治の区長あたりは強制的に巻き込みなさい」「嫌でも参加するように」というくらいの強制力を持たないと、「自由に参加してください」なら、なかなか集まりが悪いと思います。ある程度、そのような立場の人を巻き込むということが必要です。強制的に「区長さん頼みますよ！」といたらいいと思います。それくらいは区長もやってくださると思います。ですので、そのような立場の人をもっと利用するということが大事な、と私は思います。

山崎

ありがとうございます。最後に関大生、おそらく1年生や2年生の新しい学生さんかなと思うのですが、何かありませんか。せっかくこういうことが佐治で起こっているのに、何かこうしてみたいなどの意見を聞けたらなと思います。

熊崎

関西大学1回生の熊崎です。僕たちは、夏休みの期間を利用して、佐治での“ワークキャンプ”という形で地域の方たちと交流し、コミュニケーションを図ってきました。

僕の受けた丹波のイメージは、今日この後報告会もさせていただくのですが、とにかく“外から来た僕たちでも暖かく包み込んでくれる、アットホームな元気のあるまち”だと感じました。関西大学と氷上西高校が連携をとっていくとあったのですが、これからどうなっていったらいいかなという僕の意見としては、関西大学とこの丹波、佐治の関係をもっと深まって、もっといろんな活動が一緒にしていけたらいいのではないかと考えています。

山崎

ありがとうございます。もう一人手を挙げられていたという女の子でしょうか、せっかくなのでお願いします。

関

お話ありがとうございました。神戸大学農学研究科、修士1年の関と申します。このプログラムに載っている地図の篠山の方で、城下町の下に活動エリアの丸があると思います。私は、こちらの真南条という集落で、里山の整備を住民の方々と一緒にさせていただいております。

質問なのですが、みなさんがそれぞれどのような想いで何をされているのか、今回の発表ですごくよく分かったのですが、どのように連携されているのか、また、その成果と課題は何なのか、教えていただければと思います。

出町

成果は、おそらくあまり目に見えないもので、小さなことが少しずつ起きていることで、一概に言えないってことがいいのかなと思っています。「小さな変化でいいや」と、周りの方たちがだんだん思ってきていることが成果かなと思います。「関大が来てどんなまちになるんやろうか」ではなく、「なんかちょっとずつ良くなっているぞ、それでええか。」と、大きなことを求めなくなっているのがすごく重要なと思っています。そんな人たちがどんどん増えていってくれたら嬉しいなと思います。それが課題というわけではないですが、そういう理解を示していってもら

えたらと思います。これは佐治だけではないと思います。他のどんな地域も一緒ではないかなと思っています。

加藤

学校としての立場でいえば、子どもたちが地域に出て、自分の存在感をあらためて認識できるということ、今の子どもたちは自尊感情が低いといわれていますよね。「自分でもこんなことができる、こんなことができたんや」「『ありがとう』って声かけられた」など、関大さんと一緒に活動することで、そんなことをまちで体験できるんです。

今日もうどんを作ったりアナウンスを担当したり、違う会場で和太鼓をたたいたりしていますが、とにかくそういうことが、自分の再認識や自信に繋がっています。また、丹波市の子たちばかりですから、丹波を愛する子どもたちの一番底のところ根付いていくべき感情ではないかと思っています。

足立（宏）

成果と言いましても、大きく目に見えるようなことははっきりいってございません。ただ極一部の方には、参画していただいております、元気印が少しついたかなという感じがしております。先程も申し上げましたように、継続することが非常に重要だということです。

それからもう一点は、もう少し欲を言えば、この前NHKの「クローズアップ現代」の中で、コミュニティーに関する放送があったのですが、みなさんご覧になられましたでしょうか。九州の宮崎の延岡というのは旭化成の城下町なのですが、この駅前というのが寂れており、じゃあここをどのように再生するのかということで、大阪の専門の方も参画され検討されておりました。結局そこはどのような方法でやったのかというと、とにかく住民がワイワイガヤガヤ朝まで議論を交わしました。その中でKJ法で分類していくと、例えば音楽関係のイベントをすとか、家庭の編み物教室をすとか、みなさんいろいろ趣味がありますから、そういうものに分類して、そしてそこで責任者を決めて、その事業を立ち上げていくというような放送でした。それも一つの方法ではないかなと思いましたが。ただこの場合、非常に重要なのは、やっぱりやる気がないとダメですね。やる気がないところでいくらやっても何もならないので、いかにやる気を育てるかというのが非常に大事なかなと思っています。

加藤

課題を忘れておりました。課題は、“関西大学との連携協定の締結”です。やる気があるときにしっかりそういう締結を結ぶことで、飛躍もできると思っています。教職員も生徒もそういう風に考えていると思います。

山崎

ありがとうございます。そろそろお約束の時間がきましたので、簡単にコメントさせていただいて、このシンポジウムを閉じたいと思います。

このシンポジウムの横断幕、見えますでしょうか。横の緑の文字を見ますと、実は「まじる・きづく・かわる」という3つの言葉でサブタイトルがついています。どうやらこの「まじる・きづく・かわる」ということが非常に議論されていたのではないかなと思います。

青垣の“空き家”というのは、全国どこにでもある問題だということはもちろんそうなのですが、実はこの“空き家”というのは問題として見ることもできるのですが、もう一つ“違う使い方をする”といったような“可能性の場所”としても一回見直したということが、青垣の一つのポイントではないかなと思います。そこにはリノベーションを起こす可能性のある場が起こりうる、ということに気がついて、佐治倶楽部ですとか、いろんなことが展開して、今日もお祭りでいろんな活用がされていると思います。そのリノベーションのできる場に人が集まることによって、なんらかの交わり合いが起きます。関西大学が来たことによって、地元の方々はいろんな活動を展開し始める、高校だってやる

気になる、というようなことが起き始めます。そんな場をどんどん可能性のあるものにつくっていくということが一つ重要なのかなと思います。そういうときに、今日のお祭りのような一つの晴れの舞台を活かしていくというのが、最初の入り口としては重要な手法なのかなと思います。ただ、晴れ間ばかりだと疲れてしまうので、だんだん落ち着きながら継続的にしていかなければならないというのが、議論として展開してきているのかな、という風に思います。

「まじる」のあと「きづく」があるのですが、交じりあうとお互い違いに気付きます。大学生がまちに来ると、こんなに歴史的で文化的ストックのある美しい街並みがある青垣、佐治がこんなところにあったのかという印象を受けているのではないかと思います。

逆に、学生がまちの中に来ると、いろんな新しい目線で、実はこんなものに価値があるのか、など地元では気付かなかったようなアイデアがどんどん出てくる、というような違いによる気付きが出てきて、それが魅力になっていたり、資源が資産に変わっていったりということが起きているのではないかなと思います。

それから最後に「わかる」ですが、こういう場がいっぱいできると、全体的に佐治だけでなく、丹波地域全体にも人間関係やネットワークが張り巡らされていきます。そういうネットワークや、お互い協力関係を結ぶようなパートナーシップの関係などが、どんどん張り巡らされていって、地域全体に社会の関係の網の目が増えていくということが起きていると思います。この網の目は、実は見えないのですが、すごく重要な網の目で、これがいかに定着するかというのは、「協定を結びましょう」など色々ありますが、ちょっとした形に変えていく、見えない網の目を見えるような形に少しずつ変えていくことによって、少しずつ定着していくのではないのかなと思います。それによって、佐治も変わっていくし、丹波地域全体も変わっていく、“小さな成果”という言葉がありました。その積み重ねを佐治だけでなく、丹波地域全体で、私たちみんなが協力しながらやっていくことによって、少しずつ少しずつ変わっていくことなのかなという風に思っていて、私なりのまとめにしたいと思います。ありがとうございました。

4. 展示ブース

各大学は、「足立成人様邸土間」、「センバヤ」および「吉美屋」をお借りし、それぞれの方法で空き家を活用して活動報告などを行った。学生は、展示ブースを訪れた多くの方々とコミュニケーションを図り、大学と地域が連携した取り組みについて広く紹介した。兵庫県立大学による化石発掘体験では、小さな子どもから大人の方までが熱中しており、また、神戸大学による開発スイーツは配布開始後すぐに終了となるなど、各展示ブースが多くの来訪者で賑わった。



『センバヤ』

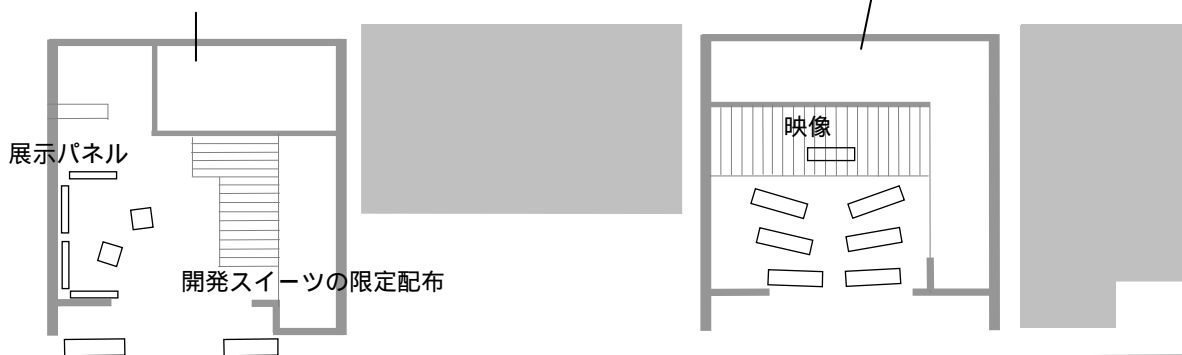
【神戸大学篠山フィールドステーション】

- ・黒枝豆など販売
- ・展示パネルによる活動紹介
- ・開発スイーツ限定配布（50食、アンケート実施）

『足立成人様邸土間』

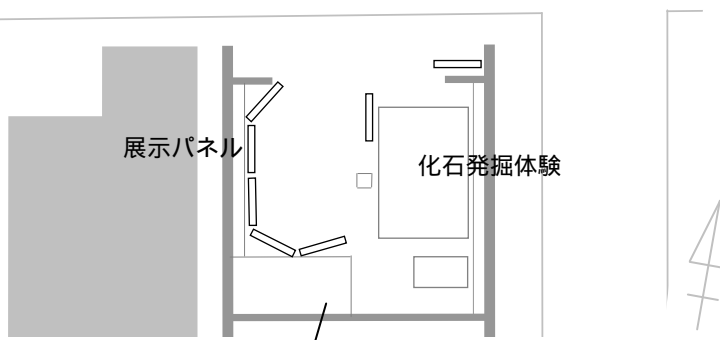
【関西大学 TAFS 佐治スタジオ】

- ・映像を用いた活動報告会



黒枝豆等の販売

(道路)



『吉美屋』

【関西学院大学柏原スタジオ】

- ・展示パネルによる活動紹介

【兵庫県立大学山南スタジオ】

- ・人と自然の博物館連携グループによる化石発掘体験
- ・展示パネルによる活動紹介